「ラ・マンチャの旅」に続くスペイン・レポート＜下＞

あなたの“見果てぬ夢”は何ですか？

コスタ・デル・ソル

人との触れ合いにまさる感動なし！

2 年半ぶりの訪問だった。コスタ・デル・ソルの太陽は、以前と変わることなく温かく迎えてくれた。イベリア半島南端ジブラルタルから東へ地中海に沿って伸びる海岸地帯。一年を通して温暖で年間の晴天が 300 日という。10 月中旬、半袖のポロシャツでちょうどよかった。

コスタ・デル・ソルの海岸

私は定年 2 年目の 2002 年 5 月から翌年 4 月まで、マラガ市のマラガ大学に留学していた。34 歳のときゼロから勉強を始め、仕事でも使ってきたスペイン語を一度、系統立てて学んでみたいためだった。またスペイン文化についてもう一歩理解を深めておきたいこともあった。

10 数人のクラス仲間は北欧三国、それにドイツ、イギリス、イタリアまた北米等から来ていた。年齢は私が一番上(当時 62 歳)。彼らは自分の息子や娘みたいなものだった。住まいはマラガから電車で 30 分のトレモリーノス。昔は静かな漁村だったがこの 20 年ほど、ヨーロッパの避寒リゾートとして開発され発展してきた。かつて日本の通産省が「シルバーコロンビア計画」と称して定年後の日本人の移住を勧めたこともある。

アパートにクラス仲間を招待、日本食をつくり楽しい交歓したのも懐かしい(このときの留学生活については拙著「定年留学してみませんか？――60 歳からのアクティブ・ライフのすゝめ――」＜文芸社＞またホームページ http://homepage2.nifty.com/donky/ で紹介しています)

アパートのテラスでクラス仲間と

今回のマラガ訪問は土・日にあたった。大学は休み。当時のクラス仲間は皆すでに母国に戻るか他国に移って働いている。せめてお世話になった先生方に挨拶だけども、とも思ったがそれも無理なのは残念だった。

一方ですばらしい感動の出会いがあった。スペインの仏教徒メンバーとの再会だった。留学時代、私は同じ仏教徒の先輩として妻と、信仰年数も浅い彼らの相談にのり励ましてきた。時にはバスで 1 時間余の西のマルベジャへ、また 2 時間余の東のネルハやアルムニェカルまでも足を延ばした。

若い芽は見事に育ち、当時マラガで数人だったのが我々が訪れた 10 月 15 日には 20 人余が集った。そして「タケシ！」「タケシ！」と抱きつきキスの雨を降らせてきたのである。一つの出会いがその後の人生を大きく変えることもある。アルカラ・デ・エナーレスいや東京から始まった“見果てぬ夢”を訪ねての地球市民との出会い。歴史遺産もだが、やはり人との触れ合いにまさる感動はない。

2 年半ぶりに再会したマラガのアミーゴたち

世界には経済的なものだけでなく、もっとエキサイティングで大事なことがいっぱいある。そんな異質な文化や生き方に感動し、啓発され、自らの世界が広がるのが異なった地域の人々との出会いと交流ともいえるだろう。

定年後は Having でなく Being が大事だともいわれる。財産や貯金を持っているより、今、何をやっているかが問題。財布にいくら入っているかが問題ではない。心にどんな夢を描いているかが問題なのである。夢が、志が人を創る。大きな夢と志は大きな人生を創る。自分を高めていくのも、貧しくさせていくのも、私はこの心次第だと思う

さて、あなたの“見果てぬ夢”は何ですか？

17 カ国のメンバーからなるコスタ・デル・ソル（マルベジャ）の仏教徒たち。